

日本音楽指導の実践—雑音性—¹⁾

伊 野 義 博

1 はじめに

学校教育における日本音楽²⁾の指導は、音楽特性を中心とし、系統立てた指導が有効であると考え、主として中学校において実践を重ねている。その概要は次のようなものである。

- ・日本音楽の音楽特性を〈発音特性〉〈時間特性〉〈旋律特性〉に分類、これが種々に組み合わせられる状態を〈不即不離様式〉と名付けた。
- ・さらに中学校3年間20時間を目安とし、文化的背景を考慮しながら、これらの特性の螺旋的配置を試みた。この際教材について〈中間教材〉〈本教材〉という新しい概念を用いた。³⁾

本稿は、発音特性の中から日本音楽に顕在する〈雑音性〉に焦点をあて、実践場面における日本音楽の具体的な指導法を提示するものである。

2 基礎的考察

1) 日本音楽における雑音性

「日本の楽器は一般に倍音を多く含んだ音色の楽音を発するが、さらに非楽音（噪音）の要素をふくんだ音が好まれる傾向も強い⁴⁾。」「欧米の楽器が不純な噪音を除去して純音に近づくことを理想としたのに対して、日本人はわざと噪音を出す工夫をした。」⁵⁾と言われる。中でも三味線の〈サワリ〉に見られるような雑音性⁶⁾は、日本音楽の中でしばしば用いられ、特徴的な音色となっている。〈サワリ〉の機構は三味線その他、琵琶にも用いられる。また箏の独特な

音色、尺八の〈ムラ息〉、箏の〈添え爪〉〈すり爪〉〈輪連〉などの奏法、などもこの範疇に入れることができよう。声の音楽においても、「さびのある声、洪い声などというものを、単に純粹に明朗優美な声よりも高く評価」⁷⁾する傾向があり、浪花節をはじめ、義太夫節、地謡、ごぜ唄など多くのジャンルの声質がそれぞれ独特の味を醸し出している。

本実践では、〈雑音性〉に対する多角的なアプローチにより、その音色に親しませると同時にこの音色特性が日本音楽の中に好んで使用され、ジャンルや楽器の音楽を特徴付けていることを理解させようとするものである。

2) 教材

(1) 中間教材、本教材

日本音楽に対して生徒に興味を生じさせ学習効果をあげるためには、彼等にとって身近な音楽や日常耳にしている音等の教材を導入することが不可欠である。これの教材を〈中間教材〉として位置づける。それに対して指導すべき各々の音楽特性を端的に示している日本音楽あるいは日本の音を〈本教材〉とする。従来の〈主教材〉〈副教材〉等の用語では、楽曲中心の考えから脱却できなく、〈主教材〉に対する〈副教材〉の主従的關係が拭いきれないという理由もある。

(2) 本実践に関する中間教材

テレビ・ラジオ等マスメディアを通して伝達される現代の音の中から〈雑音性〉に注目する。

ドラマに登場する俳優や声優、あるいは落語家、漫才師、市場の売り手、の声には雑音性が認められるものが多く存在する。最近では三味線や琵琶、あるいは雅楽などがその形を様々に変化させ、特にCM音楽として利用されている。ミュージシャンの中には声の雑音性を重要な音楽的要素としている者も見受けられる。身近な人の声、あるいは玩具などに注目させるのもよい、それらの音色を真似ることも大変有効であらう。

具体的には、

- ・家族や教師あるいは町の中など、身近な人々の声
- ・子どものおもちゃなど生活の中の音
- ・テレビ、ラジオ番組からの声や楽器の録音・録画
- ・特定の歌手やグループの音楽

などに注目し中間教材として教材化する。(表1)

(3) 本実践に関する本教材

次のジャンルや楽器の音色、技法を挙げることができる。

浪花節、義太夫節、地歌、地謡、こぜ唄などの声質、三味線〈サワリ〉〈スリ〉〈撥音〉、琵琶〈サワリ〉、箏〈添え爪〉〈すり爪〉〈輪連〉、尺八〈ムラ息〉、箏、歌舞伎のチャップ、ささら、錫杖、駅路などの音質

3. 授業実践

- 1) 所：新潟県糸魚川市糸魚川市立糸魚川中学校
- 2) 期日：1992年1月
- 3) 対象：糸魚川中学校1年生3クラス
- 4) 構成

授業は全2時間で、大きく次の3つの段階で構成された。

(1) 現在の声の雑音性

日常生活における〈声〉に注目する。そこから、雑音性を含むものを抽出し、中間教材とする。この鑑賞により、特徴ある声の音色に興味を持たせるとともに、それらが各々の音楽の構

成要素として重要な役割を担っていることを感覚的に理解させる。

中間教材として以下の5曲⁹⁾を選択し、順に鑑賞する。(表1)その際作業プリントNo.1(資料1)に基づき声の特性についてその共通性を考えさせる。

これらはいずれも強烈な雑音性を持った声で演奏されており、声の音色がそれぞれの曲を特徴付けている。この5曲の連続聴取により、声の種類や発声法について共通点を考えさせる。順番を上記のようにしたのは、導入時ロックの聴取により強烈なインパクトを期待するとともに、《うた絵巻「花さかじいさん」》の伝統的な歌唱法を後半に位置させ、本教材への流れをスムーズにすることをねらったためである。この曲は、伴奏に三味線を使用し、浪花節の歌唱法をそのまま受け継いでおり、次の学習への移行曲として最適と考えた。

(2) 日本音楽の声の雑音性

日本音楽における雑音性の特徴的な音色に親しませるとともに、それらが各々のジャンルにおいて重要な音楽的要素となっていることを理解させる。鑑賞曲は次の4曲¹⁰⁾である。(表2)

最初に浪花節の鑑賞をするのは、前時の中間教材による浪花節の歌唱法から日本音楽の世界へ自然に導くためである。この後義太夫節、声明、謡曲と続ける。いずれも粗筋を若干説明し、生徒の興味を考慮に入れ、ポイントを絞って鑑賞する。

(3) 日本音楽の楽器の雑音性

日本音楽の声に見られるこのような性質は、楽器においても見られることに気づかせる。(表3)

5) 授業構成

第1時

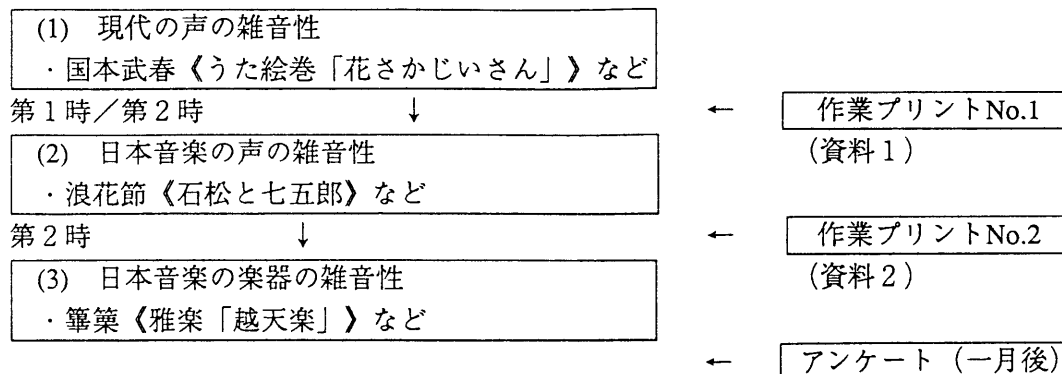


表1. 中間教材

曲 目	演 奏	鑑 賞 部 分	鑑賞時間
《チエインギャング》	ザ・ブルー・ハーツ	2番まで	2分
《これでいいのだ》	筋肉少女帯	最初から2分間	2分
《新曲B》	国本武春	1番	1分
《学校にまにあわない》	さんだる たま	1番、2番各々の後半部	2分30秒
《うた絵巻「花さかじいさん」》	国本武春	《なんと恐ろしいおじいさん》の部分	1分

表2. 本教材 (声の雑音性)

曲 目	演 奏	鑑 賞 部 分	鑑賞時間
浪花節《野狐三次》	東家浦太郎	《家へ帰れば母親が〜》の部分	1分30秒
義太夫節《心中天網島—大和屋の段》	竹本織大夫	《「小春か、待ってか」》の部分	2分
法相宗読経《唄 散華》	慈恩会	《散華》の部分	1分
謡曲《鶉飼》	宝生流	《有難の御事や、那落に沈む悪》の部分	1分30秒

表3. 本教材 (楽器の雑音性)

箏楽の音色《雅楽「越天楽」》	箏楽のメロディを中心に2分程
尺八の《ムラ息》《鹿の遠音》	《ムラ息》の部分を中心に1分程

6) 実践

(1) 展開

授業の流れ	学習活動及び教材（中：中間教材、本：本教材）	※指導及び留意点（*生徒の反応）
現代の声の雑音性 ＜声の雑音性の特徴を知り、そのような音楽の存在に気付く＞	次の曲を聞いて声の特性について共通性を考える。 中：THE BLUE HEARTS《チェインギヤング》 中：筋肉少女帯《これでいいのだ》 中：さんだる たま《学校にまにあわない》 中：国本武春《新曲B》 ・作業プリントNo.1-1に記入する。 ・各自記入した内容を発表する。 ・発表をもとに、声の音色について共通点を作業プリントNo.1-2に記入する。	※声の音色、発声の仕方に注目させる。 *声をからして歌っている感じ。 *地声で歌っていた。 *どなり声みたい。*苦しそう *がらがら声。*にごっている声 *のどから声を出している など ※生徒の発表をもとに声の音色をまとめる。→雑音性のある声
日本音楽の声の雑音性 ＜日本音楽にも声の雑音性が多く見られそれぞれのジャンルを特徴づけていることを理解する＞	次の曲を聞いて日本音楽の声の性質との共通性を感じ取る。 中：国本武春《うた絵巻「花さかじいさん」》 本：浪花節《野狐三次》 本：義太夫節《心中天網島-大和屋》竹本織大夫 本：声明《法相宗 唄 散華》 本：謡曲《鶉飼》 ・声について感じたことを作業プリントNo.1-3,4に記入する。	※「花さかじいさん」から浪花節への移行がスムーズに行くよう配慮する。 ※それぞれ語り物の粗筋を鑑賞部分を中心に簡単に説明する。

第2時

授業の流れ	学習活動及び教材（中：中間教材、本：本教材）	※指導及び留意点
声の雑音性についての確認 ＜雑音性を持つ声はどのようなものか、理解する＞ ＜日本音楽における声の雑音性についてジャンルの特徴を知る＞	前時の学習を思い起こし、声の雑音性についてまとめる。 ・作業プリントNo.2-1に沿って、声の雑音性を持つ日本音楽について、ジャンルを整理する。 ・声質における共通点を確認する。 ・代表例を真似てみる。 ・前時の曲から代表的なものを再度鑑賞する。	※ジャンルについては特に覚えることを強いない。感覚的につかめせる。 ※がらがら声、しわがれ声程度にまとめる。 ※要望の強いものにする。
日本音楽の楽器の雑音性 ＜楽器の音色においても雑音性を特徴とするものがあることを理解し、その代表例を知る＞	箏の音色や尺八の＜むら息＞を聞いて、音色の特徴を感じ取る。 ・雅楽《越天楽》の箏の旋律を聞いて、その音色の特徴を作業プリントNo.2-2に書き込む。 ・尺八《鹿の遠音》を聞いて＜むら息＞の効果について感じたことを作業プリントNo.2-2に書き込む。	※時間があれば、三味線の＜さわり＞や箏の奏法についてもふれる。 ※各々の楽器について実物があれば可能な限り実演してみる。 ※《鹿の遠音》については＜むら息＞の部分を中心に聞く。

(2) 実践の結果と考察

ア、作業プリントには、次の内容が記載された。

雑音性に関係の深い記述としては、

- ・喉から声を出している。喉だけで歌っている。
- ・どなっている。どなり声。
- ・がらがら声だ。
- ・さげんでいる声。
- ・地声で歌っていた。
- ・かれそうな声で歌っている。
- ・にごっている声。
- ・無理に出そうとしている。
- ・バリバリの声。
- ・苦しそうで一生けんめい歌っている。
- ・声を張り上げて歌っている。

これらの記述は授業者の期待したものであり、〈ガラガラ声〉→〈雑音性〉と言う項で括り、共通のイメージを作った。

一方、

- ・歌っていると言うより話している感じた。
- ・一言一言ははっきりと歌っている。
- ・何かを人に伝えようとしている。

などの反応も見られた。作業プリントの発問や作業内容の掲示が不徹底であったためと思われる。

イ、中間教材には生徒はいずれも興味を示した。

特に《うた絵巻「花さかじいさん」》は人気があり、授業後「もう一度鑑賞したい」という声が強かった。この曲は、物語であること、また物語自体が半知教材であることが、生徒の興味を喚起したものと思われる。同時にこの反応は、中間教材の使用がともすると授業の意図とは異なった方向へ流れていく可能性があることを示唆しているとも言える。しかしこの教材の使用により、本教材の学習への移行を大変スムーズにすることができた。曲が語り物であり、三味線の使用や歌唱法の点で浪花節をベースとして作曲されていることを考えた時、節回しや伴奏楽器の音色等、他の音楽特性をも考慮し、総合的に本教材に近い楽曲がより良い中間教材の条件ということができるとは思えないだろうか。

ウ、多くの教材（本実践では、計11曲）が使用されるため全体的に教材に対する情報量が多くなりがちであった。

エ、本実践では、鑑賞活動が中心となり、生徒は授業に対して受動的な場面が多くなった。今後表現活動を有効に取り入れることが必要であろう。

オ、〈日本の声や楽器の音色〉にポイントをおいたため、従来の楽曲中心の指導と比較すると、指導内容が絞られ、焦点化された実践ができた。

カ、〈雑音性〉の範囲がまだ曖昧である。特に楽器の音色において不明確な点を感じられた。

4. 生徒の変容

1) アンケートによる調査

生徒の〈音色〉に関する意識の変化を調査するため、授業後約一カ月を経てアンケートを実施した。(資料3：ア、イ、ウの各項目は資料3に対応)

2) 考察

ア：声の雑音性については、92%（よくわかった29%、だいたいわかった63%）の生徒が理解を示している。期待した数値であると言える。

イ：授業で提示した声の教材8曲に関して、その音色を「思い出すことができるか」質問した。

最も高い数値を示したのが〈浪花節〉で、69%の生徒が「思い出すことができる」と解答している。中間教材をも対象にした問いであることを考え合わせれば、単なる興味を越えた問題として、浪花節の音色が生徒に定着していることを示すものと思われる。浪花節が雑音性を持つ声の中でも特徴的・代表的な音色であること、中間教材《うた絵巻「花さかじいさん」》との関係から、同系統のジャンルの曲を結果的に2度聞いたこと、などが原因として推察される。

また、本教材の中ではこの〈浪花節〉

(69%)と〈お経〉(59%)の高率に対し、〈義太夫節〉(12%)歌謡(31%)は対象的な結果となっている。音色の区別がつきにくかったことや、生活の中で耳にする機会とも大いに関係するものと思われる。さらに中間教材と本教材とでは、前者がコンスタントな記憶の定着を示しているのに対し、後者はジャンルによって差が著しい。

ウ：ここでは、学習したことがどの程度生徒の日常生活に反映しているかを調査した。授業の効果を考察する上で、次のエの項目とともに重要な意味を持つ。

結果は30%の生徒が、何かの機会に〈声の雑音性〉を感じ取っている。生活の中で聞こえる様々な音色を意識的に聞こうとしており、音楽特性の学習成果が日常生活に反映しているものと言えよう。一方、70%の生徒にとっては授業と生活の結び付きが希薄であった。

エ：ウとの関係において、具体的な場面を答えたものである。

〈風邪をひいた時の声〉〈喉を絞った時の声〉〈のら猫の声〉など、声の音色そのものに興味をもって聞いていたり、〈八百屋の人〉〈商店のトイレ〉など生活音、環境音の中から音を拾い上げている。また、テレビ、ラジオをはじめマスコミからの影響も多い。しかしながら、日本音楽と積極的に関わろうとした結果と推察される例は少ない。他の音色特性や、旋律、時間特性の学習の積み重ねが必要であろう。

オ：人の声や歌声に対する興味を質問した。77%の生徒が授業の前と後でも〈変わらない〉と解答し、〈興味を持つようになった〉(18%)を相当上回った。

5. 成果と課題

1) 音楽特性を中心とした授業は、指導内容が焦点化され、題材内で系統立った指導が可能であった。多くの生徒が理解を示し、日常生活における学習の定着も見られた。また、複

数のジャンルの日本音楽を共通の視点(音楽特性)から捉えることができた。この結果は多層構造をなす日本音楽や他の民族音楽の指導に生かされるであろう。一方、扱う教材数が多いため、生徒に与える情報量を適宜制限する必要があった。

2) 中間教材に対して生徒は興味を示した。今後とも有効に活用できるものとする。特に本教材の移行曲としては、例えば節回しや伴奏楽器の音色等他の音楽特性も総合的に考慮し、その性質ができるだけ本教材に近いものを選択することが重要であろう。

3) 生徒の主体的活動を促すための活動を合わせて取り入れる必要がある。例えば雑音性に関しては、

- ・テレビのCM、あるいは友達や先生の声から雑音性をもつ声や音を収集する。
 - ・箏を使用し音出し遊びをする中で、色々な種類の音色を見つけたす。
 - ・子どもの玩具から使用に適するものを選び、音を出して遊ぶ。
 - ・教材の声を真似る。
- などが考えられる。

注

- 1) 本稿は1992年2月、第2回上越教育大学音楽教育研究会における口頭発表をもとに再構成したものである。なお、実践にあたって新潟県糸魚川市立糸魚川中学校比護和子先生に多大な御協力をいただいた。
- 2) ここで扱う日本音楽とは日本でおこなわれた、またおこなわれている様々な音楽のうち主として西洋音楽の手法の影響を受けていない音楽を指す。
- 3) 拙稿「日本音楽の指導—その音楽特性から—」上越教育大学修士論文、1991年
- 4) 小泉文夫『日本の音』青土社、1977年、p.240
- 5) 吉川英史『日本音楽の美的研究』音楽之友社、1984年、pp.73-74.
- 6) 〈雑音性〉という用語の使用が必ずしも適当であるとは考えていない。ここでは、非楽

- 音（噪音）の中でも三味線のサワリに代表されるようなくしびれたような音色〈ガラガラ、ザラザラするような声質〉の傾向を中心に考える。今後適切な用語があれば使用したい。
- 7) 前掲書 5) p.74
 - 8) 相原末治「共通教材の系統性」『季刊音楽教育研究』No.62. 音楽之友社、p.20
 - 9) 《チェインギャング》：YONG AND PRETTY/ザ・ブルーハーツ：クラウン/MED-30
《これでいいのだ》：猫のテブクロ/筋肉少女隊：バップ/80350
《新曲B》：福助/国本武春：ビクター/VICG-3
《学校にまにあわない》：さんだる たま/クラウン/AXCR-1
《うた絵巻「花さかじいさん」》：福助/国本武春：ビクター/VICS-3
 - 10) これらの曲はすべて次のテープによる。
日本伝統音楽芸能研究会編『日本の音、声の音楽1～2』音楽之友社、1988年
 - 11) 資料1は糸魚川市立糸魚川中学校教諭、比護和子先生による。

資料1¹¹⁾

No.1	「日本音楽の雑音性(その1)」	1991,12,
	1年組 番氏名	
	* 次の歌を聞いて「声」について感じたことを書こう。(声の種類、特徴、発声のしかたなど)	
1)	THE BLUE HEARTS ()
2)	筋肉少女帯 ()
3)	国本武春 ()
4)	さんだる たま ()
	* 4つの声の出し方について、共通点はどんなことですか。	
	()
	* 次の歌を聞いて声の性質について考えよう。	
1)	国本武春 ()
2)	浪花節 ()
3)	義太夫節 ()
4)	お経 ()
5)	謡曲 ()
	* 現代の声、日本音楽の声から感じ取ったことをまとめてみよう。	

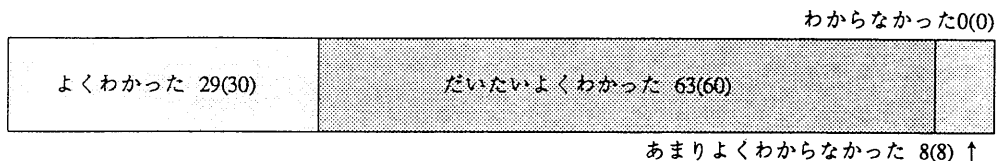
資料2

No.2	「日本音楽の雑音性(その2)」	1991,12,
	1年組 番氏名	
1	日本音楽の声の雑音性について(復習)	
	・日本音楽にも声の雑音性が見られるものがたくさんありました。	
	声の雑音性を持つ日本音楽にはどのようなものがあったでしょう。	
1)	2)	3)
4)		
	・これらの声の出し方(発声法)にはどのような特徴が見られましたか。	
	()
2	日本音楽の楽器の雑音性について	
	・日本音楽の楽器にも雑音性が見られる音色や技法がたくさんあります。	
1)	箏 ()
2)	三味線 ()
3)	尺八 ()
4)	箏箏 ()
3	この学習を通して分かったこと・感想を書こう。	

資料3 アンケートによる調査結果

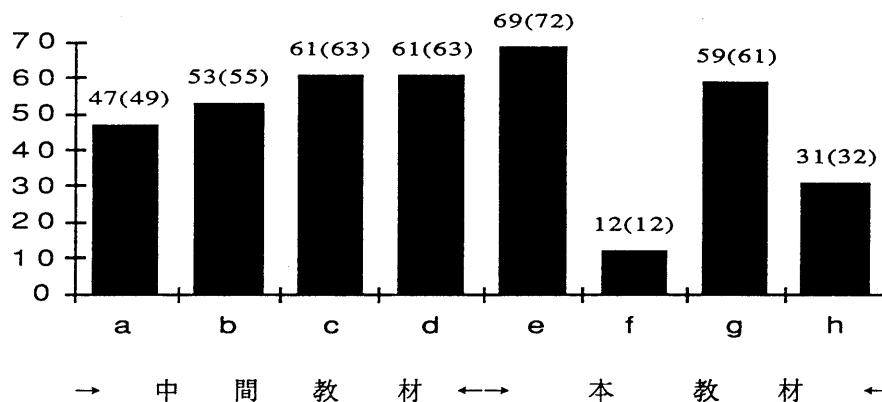
- ・対象：授業受講生徒、新潟県糸魚川市立糸魚川中学校1年生3クラス、
- ・人数：108人中解答者数104人
- ・実施日：平成4年2月21日（授業後一カ月を経過）

ア 声には雑音性を持つものがあることがわかりましたか。%（人）



イ 次の声がどんな声だったか思い出すことができますか。なんとなくでも思い出すことができるものに○をつけなさい。（複数解答）%（人）

- a：THE BLUE HEARTS b：筋肉少女帯 c：さんだる たま d：国本武春「花さかじいさん」
e：浪花節 f：義太夫節 g：お経 h：謡曲



ウ 授業のあと毎日の生活の中で（テレビやラジオ、町を歩いている時など）”あ！これは雑音性のある声だ”などと思ったことがありましたか。%（人）



エ ウで「ある」と答えた人へ、それはどんな時（こと）でしたか。（ ）内複数解答

- *音色そのものに対して
- ・喉を絞った時
- ・風邪をひいている時
- ・猫（のら猫）などの鳴き声（2）

- ・さげんでいる時 (4)
- ・どなった時 (2)
- ・おこった時
- ・おこられる時
- ・森の石松
- ・でかい声の人
- ・でかい声を出す時
- *マスコミから
- ・テレビ、ラジオなど (7)
- ・教育テレビで長唄、能を聞いた時
- ・NHKのラジオを聞いた時 (なぜか浪花節が流れていた)
- ・のど自慢
- ・宣伝でギャーとかさげんだ時や怒った時
- *生活の中から
- ・店のトイレでかすかに音楽が聞こえたとき
- ・外に出ていたとき
- ・店のレジの人
- ・町を歩いている時
- ・車やスピーカーを使った時の声
- ・八百屋の人
- ・歌を聞いた時 (2)
- ・CDを聞いている時

オ 授業の後で、人の声や歌声に興味を持つようになりましたか。% (人)

持つように なった18(19)	変わらない77(81)
--------------------	-------------

興味がなくなった4 (4) ↑